文學

岩波講座

3

岩波講座

文學

3

世界文學と日本文學

編集

野間宏　中野好夫　竹内好　西郷信綱　桑原武夫　猪野謙二　伊藤整

岩波書店

昭和二十九年四月三十日　第一刷發行

定價二五〇圓

編集者代表　竹内好

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

長野市岡田町一七六番地
印刷者　田中重彌

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

大日本法令印刷・製本

岩波講座　文學　第三卷

序

この講座の全體としての意圖、編集方針などについては、第一卷、および第二卷の序にくわしい。いま、この第三卷は、日本文學の諸問題をとくに「世界のひろがりのなかで追求する」（「刊行のことば」）ことを目ざして編まれたものであって、第四卷以後の歴史的探求の諸篇と相應じるものである。

各項目の内容に立ち入って解説を加えることは、編集者として行きすぎであり、執筆者に非禮でもあるから、あえて避けたいが、それにもかかわらず、この卷の全體としての編集態度、項目のえらび方と相互の關連などについて一言しておくことは、これからこの卷をよもうとする讀者の用意への當然の配慮であって、それを缺くならばかえって讀者に親切でなくなるだろう。

他の卷と同様、この第三卷でも、編集者はその責任において一定のワクをつくり、そのワクについて執筆者とある程度の打ち合わせをしただけであって、そのほかの一切のことはすべて各執筆者の自由裁量にまかせてある。これが現狀では最善の方法であると信じたからである。したがって、各項目はそれぞれ獨立性を保っており、獨立であることを通じて全體として一つの問題追求に協力する形をとっている。そのことを念頭において、問題の立て方ばかりでなしに、問題への近づき方についても個性に應じた思考の多様さ、柔軟さをそこから汲みとっていただけるならば編集者はありがたい。

大まかに分けて、この卷は三つの部分から成っている。最初の二項目が概括的な部分、次の五項目が各論的な部分、

最後の三項目が特殊あるいは關連問題の部分であって、同時に四卷以下の歷史、あるいは七卷以下の方法と問題の篇につながるワタリ部分となっている。

編集者が意圖し、執筆者が同意された根本態度として、どこまでも問題を今日の日本文學の問題にしぼって、當面の必要（必要という言葉を不當に卑俗化してはならない）において考える、という方針を堅持しようとしたことが、その成否の判定は讀者にゆだねるとして、少くとも意圖としては、いくらか類書と異った特色を出しているのではないかと思う。「世界文學の可能性」の項目で中島健藏氏が書いているように、今日は「世界苦」という共通の問題に人類がぶつかっている。この必至の課題を解くことなしに、解く仕事に參加することなしに、文學はありえない。世界文學はもはや單なる可能性ではなしに、なまなましい現實性を帶びてきている。力をあわせて未來社會を切り開くという重苦しい問題地點にまで來てしまっている。われわれもまた、この現實感覺から退いて空なる思辨をもてあそんでいるわけにはいかない。イギリス、フランスといった國の單位で、しかも後進國特有のあこがれの心理から外國文學の紹介をやっていたこれまでの研究態度は、考えなおすべき時期に來ているのではないか。各國別、あるいは思潮、流派、樣式といった觀點で問題をえらぶのでなくて、すべてを今日の緊急課題に對應させ、重點的に問題を取り出そうとしたゆえんである。

そのため、世界文學を考えるに當って、必要以上に歷史をさかのぼることを止めて、もっぱら現代、とくに第二次大戰の前後に敍述を集中した。二〇世紀は、革命と、ファシズム（暴力）と、人間の解體、および人間の再建の時代である。この時代の性格の究明を、文學もまた第一課題にしなければならない。「革命と文學」以下の數項目は、このような意圖の下に、相集って現狀照射が可能になるように、相互に問題領域を入りこませ、重なりあわせてある。そして全體の展望を「第二次大戰と文學」の項目において、あわせて相互の間の調整をかねようとした。いずれの項

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目も「世界苦」を取り出し、解決に立ち向う姿勢を共通にしながら、固有の問題領域において相對的な獨立性を保っている。

「世界苦」は共通であるが、そのあらわれ方は民族的個性に應じて異るし、對策もまた異るはずである。むしろ民族的個性に應じた問題發見こそが、解決へ向う第一歩である。世界は一つであるが、諸民族がそれぞれの仕方でそれに參加することによって、多様を通じての一を構成するのであって、民族を捨象した實體としての世界文學が現實にあるわけではない。このこともまた「世界文學の可能性」に說かれているとおりである。國籍喪失の文學は、人類共通の課題に參加することができず、したがって世界文學の構成單位となることはできない。「世界苦」を民族の體內に受けとめ、自分の腐肉をみずからのメスで切り開くことが必要である。「被壓迫民族の文學」という新しい觀點の導入は、そのためにどうしても缺くことのできないものであった。それは今後、日本文學分析のための有力な、また有效な方法となるにちがいない。第二卷の「日本社會の封建性と文學」と第四卷の「日本の近代化と文學」とをつなぐ方法論的なカナメの位置を占める。日本文學をかなり普遍的におおうコスモポリタニズム（その實態はこの卷の「飜譯文學の諸問題」の項目があきらかにしている）からの脫却のためには、この問題意識の把握はぜひ必要であろう。

この點、日本と異った近代化の道を歩んだ中國文學の場合は、われわれの經驗にこれまで缺けていたものを補う意味で、大切である。總じて、この講座では、西歐よりもソヴェトや中國など東方諸國、また日本とおなじファシズムの苦杯をなめたドイツなど、われわれに身近かな國の文學の方に比重をかけた。これまでの西歐偏重の態度を改め、正當なバランスを回復したかったからである。

文學は何よりも人間の問題である。世界文學の可能な像をえがくためにも、現實にある引きさかれた人間像の間に通路をつけなければならない。今日、「資本主義的人間・社會主義的人間」は、單なる理想像ではなくて、生きてい

る人間タイプの兩極である。これを型として定着させ、文學を考える補助手段たらしめるために、社會心理學の方法による分析を加えて、讀者の參考とした。

「文學における獨立とはなにか」は、今日、封建遺制からの脱却とならんで日本人の課題である民族的獨立を、文學の領域ではどう處理すべきかという、實踐的方向をふくんだ問題提出であり、かつ、世界文學を考え、學ぶわれわれの態度への反省ともなるものである。いわば「世界文學の可能性」の應用篇といった性質のものである。卷頭と卷尾にこれを對應させることによって、首尾一貫を期した。

最後にお斷りしておきたいのは、日本文學の立場で世界文學を考えるに當って、人間觀、世界觀など、もっぱら思想的觀點が重んじられて、文學のもう一つの支えである美的價値の觀點がおろそかになったことである。じつは編集プランにはこの項目が用意されていたが、さまざまな理由（スペースなど）で結局省かれることになった。今日の文學の問題が、何よりも一義的に思想の問題であることと、第七卷にこの缺を補う項目があることとで、しばらく寛恕を得たい。

もう一つお斷りしておきたいのは、豫定されていた中野好夫氏の「二十世紀文學の課題」がのらなくなったことである。これはいずれ他の卷で補われるはずだが、さしあたって、このテーマの相當部分が「第二次大戰と文學」にも盛りこまれているので、全體としてのこの卷の完結性には大きな支障を來していないことを了解していただきたい。

一九五四年四月

第三卷　世界文學と日本文學　目　次

世界文學の可能性……中島　健藏……一
第二次大戰と文學……新村　猛……三
革命と文學……金子　幸彥……七九
ファシズムと文學……井上　正藏……一一
實存主義の文學……矢內原伊作……一五三
被壓迫民族の文學……中野　重治……一七九
中國文學のふくむ問題……岡崎　俊夫……二〇三
飜譯文學の諸問題……河盛　好藏……二三一
資本主義的人間・社會主義的人間……南　博……二四九
文學における獨立とはなにか……竹內　好……二七九

世界文學の可能性

中島健藏

一

世界文學ということばは、歴史的に、ゲーテの名と結びつけられている。しかし、自國内だけでなく、外國人にも喜んで讀まれ、飜譯もされた文學は、むしろヨーロッパ中世から一六世紀ごろに多い。中世の文學は、すでに一九世紀以來の多くの文學史家が指摘しているように、むしろ汎ヨーロッパ的であって、もしもヨーロッパを當時の一世界として考えるならば、近代ほど國籍や言語籍によって制限されないものであった。

しかし、これから論じようとする世界文學とは、現代の文學の問題である。そして、ことに、現代の日本の文學の問題である。

文學における民族性の問題は、まず第一に、言語から來る。否、各國の言語の構造は、いうまでもなく、その言語を用いる人間の思惟形式の反映でもあり、またそれを決定するものでもある。風俗や感情の動き、情緒の表現など、民族性が存在することは、疑う餘地がないのである。なお、ここで特に注意しておきたいことは、國境と言語圏とは、かならずしもそのままに重なり合っているものではないということである。國家と、人種學的な區分との關係も、けっして單純ではない。たとえば、アメリカ人ということばがあり、アメリカ人と呼ばれる國民が存在し、同じアメリカ英語を用いていることは明かであるが、人種學的にいえば、アメリカ人とは、全く雜然たる混合物である。しかも、その間には雜婚があり、また逆に、本來の民族的な特質がそのまま殘って、けっして一つの平均を作ることがないままである。しかも、アメリカ文學は、明かな特質をもって存在する。時々、イギリスとアメリカとの兩國にまたがる

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

文學運動もあった。二〇世紀はじめごろのイマジストの詩運動などは、英米の連合體であった。しかし、それはむしろ例外であって、イギリス文學とアメリカ文學とは、別に發展しているのである。

このような問題は、一國内に、いくつかの言語が通用しているところでは、別の形をとる。アイレの文學は、グレート・ブリテンの文學に壓倒されて滅亡に瀕していたが、一九世紀末に、獨自の存在を主張するアイレ文學者の運動が起り、一種の鄕土文學が復活した。しかし、アイレ文學運動は、英語による作品によっておこなわれたのであった。

ところが、同じころ、フランスのプロヴァンス地方に起ったフェリブリージュの運動は、現在のフランス語、すなわち、北方語に對して、地方語として殘っているプロヴァンス語、すなわち南方語による文學の復活運動であった。

個々の實例によって考えると、文學における民族性の問題と世界性の問題とは、求心的な傾向と遠心的な傾向とも考えられるし、排他的な動きと、親和的な動きとも考えられる。どちらにしても、文學から民族性が全く失われることはありえない。これは文學だけの問題ではなくて、人類の生物學的な條件、政治的、社會的な條件の問題である。一方、文學の世界性も、現に事實として認めなければならない。

ゲーテにおける世界文學の概念は、たしかに可能性の問題として提出されたものであった。ゲーテの時代は、フランスの文學がヨーロッパ的世界の中心をなしていた。それに對して、ドイツ民族性の主張があり、「もっとも優れた國ドイツ」という觀念が强調され、その延長としてドイツの文學の世界性が問題になったわけである。ゲーテは、民族主義から一歩ぬけ出て、各國人が他國の文學によっても感動を受け、認識に影響を與えられ、その結果、はじめから世界の讀者を對象とするような文學の發生が可能であると考えたのであった。ゲーテ自身は、みずからこのような可能性を實現に移したといえる。ゲーテの『若きヴェルテルの惱み』、『ファウスト』などは、ゲーテ的な意味におけるいわゆる「世界文學」のもっとも明かな例といえる。

われわれは、ここに、各國文學の世界性という問題を論じるべきであろうか。あるいは、文學そのものの超民族性を論じるべきであろうか。文學そのものの超民族性とは、もちろん、世界語による文學などを考えているのではない。人類に共通普遍な人間性というものをまず想定して、たとえ表現が民族的にわかれていても、本質的には、あらゆる文學が共通の基盤をもち、共通の水準によって評價され得るという考え方である。この考え方の方からはいっていくと、いやでも應でも、各國文學の世界性という問題に導かれる。

逆のコースを通っても同じことである。各國文學の存在は、明かな事實であるから、それを考察の素材として、自國文學が外國人にどのように讀まれ、理解されているか、諸外國の文學が、自國民にどのように讀まれ、かつ理解されているか、を考えると、ここに、一つの歴然たる事實が見えて來る。理解の點はあとにまわすとして、自國の文學と共に、外國の文學がさかんに讀まれているという世界的事實がそれである。ことに、各國の古典文學は、刻一刻、國籍が二重三重になり、各國の教養の中に、ひとしく古典として編入される傾向にある。現代の新作品についても、世界的な評價がきわめてすみやかにおこなわれて、その飜譯が廣く讀まれるようになる。そういう事實をもとにして考えれば、「世界文學」は、もはや可能性の問題ではなく、實現されている現代の一社會現象である。音樂や造型藝術とちがって、各國の間における言語の相違という壁は、なかなか越えがたいはずである。音樂や、造型藝術では、たとえば、世界音樂とか、世界繪畫とかいうことばは意味をなさない。しかし、文學の場合には、たしかに、世界文學ということばが、何かの具體的な意味を暗示している。

これは、文學だけのことではないが、時々、「國際主義」、「世界主義」が政治的な意味で强調されることがある。これに對立するものとしては、一方には民族主義があり、また一方には、階級的世界觀による別の見方がある。世界文學という考え方にも、これらの一般的な主張が深く關係しているので、一そう詳しい考察に入る前に、一應それら

の内容を明かにしておきたいと思う。

國際主義とは、インタナショナリズムのことであるが、この考えの中には、國家の複數的な並存を第一の前提とするという特質がある。獨立の國家がたくさんあって、それらが互に友好關係を保ち、たとえば自由な文化の交流、自由な討論などをおこなって、協調を維持していくというのである。現在でも、いろいろの國際會議が世界の各地で開かれているが、その基礎にはこれがある。この考え方をもっともはっきりと示していたのは、第一次大戰後の國際連盟のあり方であった。國際連盟は、民族の自主性を根本原則としていた。ことに、植民地的な民族の隷屬に對しては、住民の投票によって歸屬を決するという手段までがとられた。しかし、これは、獨立ではなく、けっきょくのところ、どこに歸屬するかをみずから決定するという程度のものであった。また、國際連盟では、多數決による決議に對して、少數意見が服從する義務もなかった。一票でも反對があれば不成立だったのである。

國家あるいは民族を單位とする考え方に對して、コスモポリタニズムがある。これは、ふつう、世界主義とも譯されているが、內容は、むしろ個人を中心とする考え方である。國家とか、民族とかを超えて、各人が、世界人として、「世界を家として」自由に生活するという考え方である。國境の撤廢、民族的特性を最小限度にしか認めないこと、このような考え方が加わっていれば、これは、コスモポリタニズムである。事實、コスモポリタンの名にふさわしいような人間が、少數ではあるが各國にいる。また、「世界政府」というような考え方の中にも、コスモポリタニズムにもとづくものがないではない。

國際主義と同じく、インタナショナリズムと呼ばれ、時にはコスモポリタニズムと同じく世界主義とも呼ばれるが、ここにもう一つの考え方がある。それは、世界の諸國間の關係を、おのおの完全に獨立している諸國の集りと見るよりも一歩前進して、これまでの考え方のような完全獨立ではなく、國際的な連合に、ある程度まで主權を委任し、多

數決の決議に從うという國際連合的な考え方である。これをさらにおしすすめていくと、ヨーロッパ連邦とか、さらに全世界的に、世界連邦とかの考え方になる。世界共通の憲章を持ち、各國はその範圍内で自立する。文化にもこれに通じる考え方があって、「文化交流」が國際主義的であるとするならば、世界を一つにつなぐ專門的な連合を舞臺として、超國境的に活動しようとする。コスモポリタニズムとちがうところは、國籍とか、民族性とかを否定しないで、それらを保ったまま、世界的な連絡をつけるのである。その場合、世界的な連絡の方を重んじるという點が、國際主義よりも一歩進んでいる。國際條約が國内法に優先するという考え方の基礎はここにある。

これらの考え方は、抽象的なものでもなく、架空のものでもない。現に世界中に實證を見出すことができる思想である。これらとはちがう世界の考え方は、たとえば、宗教による超國家主義である。宗教にも、全く民族的なものがあるが、キリスト教をはじめ、世界宗教と認められるものがいくつかある。宗教觀による世界は、やはり一つである。しかし、入信の有無によって、人間は二つ以上の群にわかたれる。そして、一つの聖典を持ち、それらの聖典は、キリスト教の場合などは、世界各國語に譯されながら、ひとしく聖書であって、同じ意義を持っている。コスモポリタニズムでは、世界語が問題になる。エスペラント、イドなどの人造語を、少くとも世界共通の第二言語として普及させようとする。

さらにこれとちがうのは、唯物史觀による世界像である。共産主義の世界では、これまでのような國家はなくなるが、民族はその特質を保存し、それをプラスになるように生かしていくことが求められる。また、現在では、世界にすでに共産主義國が存在する以上、それが資本主義國と對立するのは當然であるが、さらにそのほかに、階級による世界的な横のつながりが考えられる。すなわち、資本主義國の中にプロレタリアートがいて、それの連合が國際的に組織され、舊世界の内部をも二つにわけていると考えるのである。

これもけっして架空のものではない。教團の存在も、階級政黨の存在も、ともに現實である。そして、これらの考え方は、どれに從っても、「世界」を考え、自分と世界とのつながりを考えることになる。

ところが、最後に、「世界」よりも、自分の屬している國家、あるいは民族だけを中心として考え、あるいは、もっと狹く、ただ自分を中心として考える人々がいる。世界について、特に否定的に考えるわけではなく、認識がそこまで及ばないで、別に特別の意識もなく、自分の眼のとどく範圍内だけを考えている場合が大部分である。もっとも、世界的なつながりを拒否し、あるいは自國の利益だけを基準として考えようとする民族主義もある。その著しい實例は、ファシズムである。現在では、自給自足が可能な國家は、きわめて少數の大國だけであるが、それらの國々としては、國際關係こそ避け得ない重荷であって、その他の國々は、自給自足が不可能であるし、一部の偏狹な人々のファナチシズムとして、孤立的な國家觀や民族觀が存在するにすぎない。

以上のような整理ののちに、具體的に世界文學の考察にはいっていこう。

二

わたくしは、これまで、あまり深い反省もなく、「世界」ということばを使って來た。しかし具體的に、「世界文學」を考え、それを日本の現代文學の問題として考える段になると、日本人であるというわれわれにとっての現實を踏まえて、改めて考えなければならなくなって來る。そのような現實的な立場に立った時、「世界」は、日本人にとってどのように考えられているであろうか。

一ばん單純な考え方は、「日本」に對して、「世界」をあいまいな對立として感じるものである。あるいはもっと初歩的に、日本のほかに存在する「外國」を、あいまいに認識しているだけの人々も多いであろう。そのような人々にとっては、「世界」は、問題にならないのである。文學にしても、日本文學のほかに、あいまいに外國文學が存在する。それも、單に飜譯を通じて存在するだけである。後にいうが、實は、外國文學の飜譯を、特別な意識なく讀んでしまうという事實が、きわめて大きいのである。日本の文學に對しても、外國の文學に對しても、特別の區別をもうけないで、同樣に鑑賞し批判するという形が、もっとも素朴であると同時に、もっとも熟した形と認められる。

「世界」という考えが、一般社會人にとって觀念的なものでなく、具體的な實感となったのは、比較的最近のことである。すでに古くから、(といっても幕末以後についていうのであるが、)自分自身を、國民として、民族の一員として、あいまいに外國に對立させるだけでなく、世界の中に生存する一員として認識させようとする啓蒙的な思想が、けっして珍らしくはなかった。福澤諭吉の『世界國盡』によって代表される一連の啓蒙書があり、後にはこの意識が、かえって劣等感の原因になったり、ファナチックな愛國思想に化けたりもしたが、日清、日露の戰爭を經て、第一次世界大戰に參加するあたりまでに、しだいに根をおろして來たのであった。

過去における日本の文學の國際的接觸は、三つのタイプにわけることができる。

その一つは、主として飜譯による外國文學の攝取とその消化である。第二は、國際的連絡、あるいは文化交流の形式による文學運動である。第三は、自國文學を外國に移し出そうとする努力である。これらはいずれも、歷史的な事實から拔き出したものであるが、まず、飜譯の重要性について考えよう。

文學史を實證的な科學として方法論的に確立しようとしたフランスのランソン教授は、基礎資料としての文獻表の作製に當って、外國文學の飜譯、紹介をきわめて重く見ている。これは、フランスの文學が、古くからヨーロッパ系

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com